

平成19年
7月2日

病害虫発生予報 7月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

< 目次 >

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病(葉いもち・穂いもち), 斑点米カメムシ類, イネツトムシ	1
ナシ：黒星病, ハマキムシ類, ハダニ類, ナシヒメシンクイ	2
夏ネギ：黒斑病, ベと病, ネギアザミウマ	4
抑制トマト：トマト黄化葉巻病	6

【その他の病害虫】	6
水稲, サツマイモ, ナシ, ブドウ, カキ, クリ, 夏ネギ, 夏秋ナス, アブラナ科野菜共通, 抑制ピーマン	

・ 病害虫ミニ情報

7月以降に発生する水稲病害虫の防除について	8
果樹のカメムシ類について	9

・ 今月の気象予報

・ テレホンサービス

029(226)5321, 6131

本文に記載された農薬の登録内容は、平成19年6月27日現在のものです。

農薬登録速報については、農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
<http://www.maff.go.jp/nouyaku/> 内の登録速報を参照してください。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1．いもち病（葉いもち・穂いもち）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
やや遅い（葉いもち）	平年並	県下全域
やや早い（穂いもち）		

[予報の根拠]

6月下旬現在、葉いもちの発生はやや少ない（表1）が、BLASTAM によると6月下旬にいもち病の感染に好適な気象条件が多く出現した。

いもち病の感染に好適な気象条件が出現してから約1週間後にはほ場での発生がみられるため、7月上旬に発生量は平年並まで増加すると考えられる。

水稲の生育は平年より進んでおり、穂いもちの発生は平年よりやや早いと予想される。

気温 20～25 で連続した弱い降雨が続く場合が感染に好適であるが、気象予報によると、向こう1か月の気象は平年と同様に曇りや雨の日が多く、発生に適した条件である。

BLASTAM：アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム

表1 葉いもちの発生状況（6月下旬調査）

	葉いもち発病度			発生地点率（％）		
	本年	前年	平年	本年	前年	平年
県北	0.1	0.5	2.3	7	21	32
鹿行	0.2	0.2	1.3	17	17	18
県南	0.0	0.1	0.4	0	5	12
県西	0.0	0.6	0.1	0	8	6
全県	0.1	0.4	0.6	5	14	16

[防除上注意すべき事項]

水田の葉色が濃い部分や水口、置苗の付近を観察し、初発の確認に努める。現在発生がみられないほ場でも、例年梅雨明けとなる7月下旬まで本病の発生量は増加するため、発生がないか今後もよく観察する。

発生がみられる水田では防除を実施する。

置苗はいもち病の発生源となるので、早急に水田から持ち出して処分する。

穂いもちの防除は、穂ばらみ末期～穂揃期に行く。粒剤で防除する際は、出穂の10日前までに必ず湛水状態で散布する。止水期間後は、生育に応じた適正な水管理を行う。

2．斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

(水稲 斑点米カメムシ類 続き)

[予報の根拠]

6 月下旬現在，水田周辺のイネ科雑草において，クモヘリカメムシ成虫が確認されたが，発生量は平年並である(表 1)。

表 1 水田周辺のクモヘリカメムシ発生状況(6 月下旬調査)

	調査地点数	発生地点数(地点率)		
		本年	前年	平年
県北	29	1 (3.4%)	0 (0%)	0 (0%)
鹿行	6	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
県南	19	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
県西	12	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
全県	66	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

[防除上注意すべき事項]

出穂が周辺よりも早い水田では成虫の飛来が集中しやすいので，発生には十分注意する。農道や畦畔等のイネ科雑草は斑点米カメムシ類の生息場所となるため，除草に努める。出穂近くになってからの除草は，カメムシ類を本田へ追い込むことがあるので注意する。出穂期～穂揃期に多数の斑点米カメムシ類を認めた場合は防除を実施する。乳熟期～糊熟期は，幼虫の発生を認めた場合に薬剤防除を行う。幼虫の防除は適期に行う。幼虫の防除適期は予報 8 月号を参考にする。

3. イネツトムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

6 月下旬には例年発生を認めないが，本年の調査では広範囲で発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

葉色の濃い水田では発生に注意する。被害が大きくなる第 2 世代幼虫の発生は 7 月下旬からと考えられるので，7 月末～8 月初めには水田を観察し，幼虫が小さいうち(幼虫がイネの葉先を巻き始めた時期)に防除する。
(p.8 病害虫ミニ情報参照)

水田において農薬を使用するときは，農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認するとともに，止水期間は 1 週間程度とすること。

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	多い	県下全域

(ナシ 黒星病 続き)

[予報の根拠]

6月下旬現在、発病葉率及び葉での発生地点率は、平年より高い。また、発病果率及び果実での発生地点率は、県西地域で平年より高い。

本病は降雨により伝染するため、今後梅雨明けまでは黒星病の発生に好適な条件である。

[防除上注意すべき事項]

発病した葉及び果実は二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、土中深く埋める。

発病部位を除去後、圃場での発病状況に応じて以下を参考に、確実に防除を行う。なお、果実肥大最盛期は「幸水」果実への感染が特に盛んになるため、DMI 剤の散布を必ず実施する。

a) 発病が多い圃場では、防除暦で7月中旬に記載されているアンビルフロアブルを7月上旬に散布し、その後7月中旬にストロビードライフフロアブルを散布する。

b) 発病が平年並の圃場では、防除暦に基づき、7月上旬にストロビードライフフロアブルを、7月中旬にアンビルフロアブルを散布する。

薬剤散布量は、10a 当たり 300 リットルを目安とし、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

薬剤耐性菌出現回避のため、DMI (EBI) 剤の年間使用回数は原則 3 回以内に抑えることが望ましい。

(平成 19 年 6 月 26 日発表の病害虫発生予察注意報第 1 号参照)

2. ハマキムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

6月下旬現在、被害果率及び発生地点率は、平年よりやや高い。また、予察灯(笠間市)への誘殺数は平年より多い。なお、予察灯(かすみがうら市)及びフェロモントラップ(笠間市)への誘殺数は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

防除暦に基づき、7月中旬にハマキムシ類に登録のある薬剤を散布する。なお、徒長枝が多い圃場では、発生が多くなりやすいため、特に防除を確実にを行う。

薬剤散布量は、10a 当たり 300 リットルを目安にする。薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

3. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
やや早い	やや多い	県下全域

(ナシ ハダニ類 続き)

[予報の根拠]

6月下旬現在，寄生葉率は平年並～やや高く，発生地点率は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

ハダニ類は，発生が多くなると防除が困難となるため，発生初期に防除を行う。
薬剤抵抗性ハダニ類の出現を避けるため，同一系統の薬剤の連用は避ける。
カメムシ類およびシンクイムシ類を対象に合成ピレスロイド系剤を散布すると，ハダニ類やカイガラムシ類が増加する場合がありますので，合成ピレスロイド系剤の散布回数は最小限に抑える。

4. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

6月下旬現在，被害果は認めず平年並である。
フェロモントラップ（笠間市）への誘殺数は平年並であるが，4月からの誘殺推移のパターンは，ナシヒメシンクイが多発生した平成13年と類似している。

[防除上注意すべき事項]

防除暦に基づき，7月中旬にシンクイムシ類に登録のある薬剤を散布する。
薬剤散布量は，10a当たり300リットルを目安にする。薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。
被害果を見つけた場合は，土中深く埋めるなど速やかに処分して，次世代による被害を防ぐ。

本年は徒長枝の生育が旺盛であるため，防除の際は薬液がよくかかるよう特に注意し，丁寧に散布する。

夏ネギ

1. 黒斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

6月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年よりやや高い。
気象予報によると，向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

発病初期の防除に重点をおく。その後は発病状況に応じて薬剤散布を行う。
薬剤散布は展着剤を加用し丁寧にを行う。また，薬剤を散布する際は，収穫前日数に十分注意する。

(夏ネギ 続き)

2. ベと病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

6月下旬現在，発病度，発生地点率ともに平年より高い。
今後は，気温の上昇とともに発病が抑制されるものと考えられる。

[防除上注意すべき事項]

発病初期の防除に重点をおく。その後は，発病状況に応じて薬剤散布を行う。
薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に行う。また，薬剤を散布する際は，収穫前日数に十分注意する。

3. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

6月下旬現在，被害度，発生地点率ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

気温の上昇に伴い増殖が速くなるので，発生が認められる圃場では，できるだけ早期に防除を行う。
発生源となる圃場周辺の除草を徹底する。

抑制トマトのトマト黄化葉巻病について

[現在の状況]

6月に行った検定において、5月定植の作型で発病株を確認した。

本病を媒介するタバココナジラミ類は、野外でも生育・繁殖しており、発生量の増加及びハウス内への飛び込みが懸念される。

ハウス以外にも、露地にトマトが作付けされており、本病に感染する可能性が高くなっている。

[防除対策]

発病が認められた株は、感染源となるため早期に抜き取り、ビニール袋等に入れて密封し、株を腐熟化させてから処分する。

設置が可能な場合は、ハウスの開口部に防虫ネット(0.4mm目合い)を設置し、タバココナジラミ類のハウス内への飛び込みを防止する。なお0.4mm目合いの防虫ネットを設置した場合、通気性が低下し、病害の発生が助長されたり、ハウス内の温度が高くなることが予想されるので、ダクト通風やサイドの開閉、遮光資材の利用等、温湿度管理には十分注意する。

薬剤散布にあたっては、タバココナジラミ類は葉裏に寄生するため、薬液は下方から吹き上げるように散布する等、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

雑草はタバココナジラミ類の生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水 稲	紋枯病	発生量: 平年並	6月下旬現在, 平年並の発生である。
	稲こうじ病	発生量: -	穂ばらみ期~出穂期にかけて低温で降雨が多いと発生が多い。
	ニカメイガ	発生量: -	近年, 発生量は増加傾向にある。防除は8月上旬~中旬に行う。
	イネクロカメムシ	発生量: 平年並	6月下旬現在, 山林付近の水田の周縁部で発生を認めている。
サツマイモ	イモキバガ	発生量: 多い	6月下旬現在, 平年よりやや多い発生である。
	ナカジロシタバ	発生量: やや多い	6月下旬現在, 平年並~やや多い発生である。

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
ナ シ	アブラムシ類	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。 梅雨明け後，高温条件になると発生は減少する。
	カメムシ類(越冬世代成虫)	発生量：少ない	6月下旬現在，予察灯(かすみがうら市)へのチャバネアオカメムシの誘殺数は平年より少ない。7月以降に発生する新成虫の活動状況については，今後の防除所の最新情報を確認し，防除の参考にする。(p.9 病害虫ミニ情報参照)
ブ ド ウ	べと病	発生量：平年並	6月下旬現在，発生を認めず平年並である。
	晩腐病	発生量：平年並	6月下旬現在，発生を認めず平年並である。袋かけ前の防除を徹底する。
カ キ	落葉病類	発生量：平年並	6月下旬現在，発生を認めず平年並である。
ク リ	モモノゴマダ ラノメイガ	発生量：やや多い	6月下旬現在，予察灯(かすみがうら市)への誘殺数は過去5年間の平均値と比べて多い。「神峰」は，モモノゴマダラノメイガの被害が発生しやすいので特に注意する。
夏 ネ ギ	さび病	発生量：平年並 ～やや多い	6月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
夏 秋 ナス	マメハモグリ バエ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。発生初期の防除に重点をおき，その後の発生状況に応じて薬剤散布を行う。
	ミカンキイロ アザミウマ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
	ミナミキイロ アザミウマ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並 ～やや少ない	6月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
ア ブ ラ ナ 科 野菜共通	コナガ	発生量：やや多い ～多い	6月下旬現在，八千代町のフェロモントラップへの誘殺数は平年よりやや多く，笠間市のフェロモントラップへの誘殺数は平年より多い。
抑 制 ピー マン	アザミウマ類	発生量： -	6月下旬現在，半促成栽培で多い発生である。蛹が残らないように，前作の栽培終期の防除を徹底し，終了時には蒸しこみを実施する。

7月以降に発生する水稻病害虫の防除について

水稻に発生して問題となる病害虫には、いもち病，斑点米カメムシ類，ニカメイガ，イネツトムシがあります。下記を参考にこれらの病害虫の発生時期や防除時期を把握して効率的な防除計画を立てて下さい。また，防除の実施に関しては水田をよく観察し，病害虫の発生状況にあわせて効果的に防除を行って下さい。

発生消長と防除の概要

本年の発生状況及び防除対策については今月の予報「注意すべき病害虫」または予報8月号を参照して下さい。

- 1) いもち病 葉いもちは6月下旬から発生し始め，7月下旬にピークとなる。梅雨明けが遅い場合には病勢が進展し，出穂期に降雨が続いた場合は穂いもちが多くなる。穂いもちの防除は，穂ばらみ末期～穂揃期に行う。粒剤を使用する場合は出穂の10日前までに散布する。
- 2) 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ） 出穂とともに成虫が飛来し，イネの葉や穂に産卵し，ふ化した幼虫が収穫期まで穂を加害する。防除は成虫が飛来する出穂期～穂揃期及び幼虫が発生する乳熟期～糊熟期に行う。
- 3) イネツトムシ 幼虫は6月下旬～7月中旬及び7月下旬～8月中旬に発生し，葉を食害する。7月下旬から発生する幼虫による被害が大きい。防除は7月6半旬～8月1半旬に行う。
- 4) ニカメイガ 第1世代幼虫による被害は心枯れ茎，第2世代幼虫による被害は白穂となって現れる。第2世代幼虫を対象とする防除は，8月上旬～中旬に行う。

近年問題となっている病害虫の発生と防除時期のめやす(7月以降)

	7月			8月			9月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
イネの生育				出穂	乳熟	糊熟			成熟
発生消長と被害	いもち病		葉いもち発生ピーク	穂いもち感染時期					
	クモヘリカメムシ	イネ科雑草に生息		成虫飛来ピーク	幼虫発生期				
				多発水田では青立ち	玄米加害				
	イネツトムシ	第1世代幼虫		第2世代幼虫					
				食害のピーク					
ニカメイガ		第1世代幼虫			第2世代幼虫			ワラ内で幼虫越冬	
		心枯れ茎			白穂				
防除	葉いもち	乳剤等							
	穂いもち	粒剤		乳剤等					
	クモヘリカメムシ	イネ科雑草を除草		乳剤等		乳剤等			
	イネツトムシ			乳剤等					
	ニカメイガ			乳剤等				収穫終了後はワラをすき込む	

注1) 防除時期は平年の発生をもとにしためやすなので，病害虫発生予報を参考に，水田をよく観察して防除を行う。

注2) 5月上中旬移植，中生品種の場合。

果樹のカメムシ類について

チャバネアオカメムシやクサギカメムシなどのカメムシ類は、ナシやカキなどの果実を吸汁加害するため、防除上重要な害虫となっています。これらのカメムシ類の県内での発生状況及び発生生態などについてお知らせします。

本年の発生状況と今後の予想

カメムシ類の越冬量は過去 11 年中最も少なく、6 月下旬までの予察灯への誘殺数は平年より少ない状況です。従って、**越冬した成虫（越冬世代成虫）**のナシ園への飛来数は、平年より少ないと予想されます。

また、今年はカメムシ類の主要な餌のひとつであるヒノキ球果の量が少ない傾向であるため、7 月下旬頃から発生する**次世代成虫**の発生量も少ないと考えられます。なお、今後とも果樹カメムシ類の予察を継続しますので、防除所の情報を参考にしてください。

発生生態

果樹のカメムシ類は、成虫が落葉の下や建物の隙間などで越冬します。越冬した成虫は、気温の上昇に伴い活動を開始し、サクラやクワ等の果実を吸汁し、スギやヒノキの球果が成熟すると、繁殖地であるスギ・ヒノキ林へ移動します。主要なエサはスギやヒノキの球果です。果樹園へは、この移動の過程で一部が飛来します。繁殖地では、主にスギやヒノキの葉や球果に産卵し、7 月頃から新世代成虫が出現します。成虫は年 2~3 回発生し、11 月になると越冬場所へ移動し、休眠します。

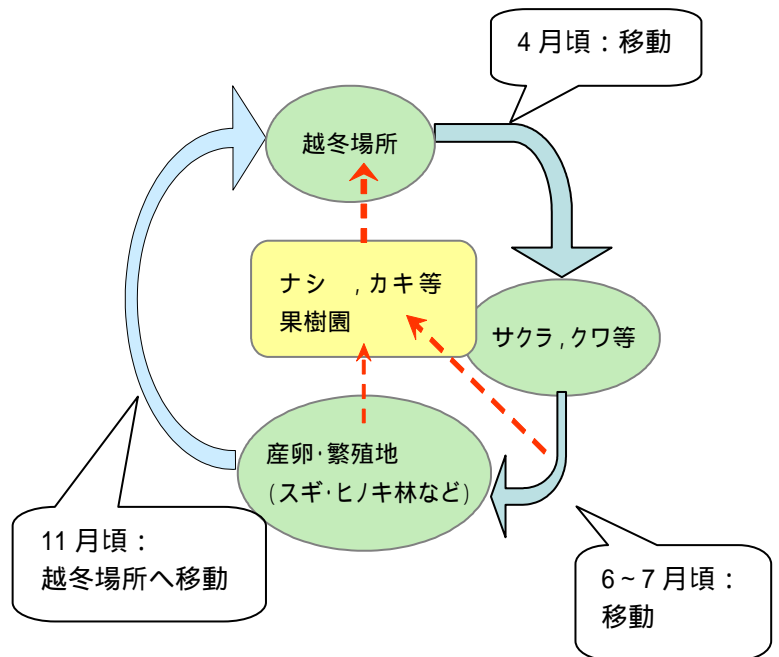


図 果樹カメムシ類の発生動向

防除対策

1) 物理的防除

多目的防災網（6mm 目または 9 mm クロス目）の設置が有効です。これにより吸蛾類や気象災害（雹）による被害も同時に軽減することができます。

2) 薬剤防除

通常の発生であれば、病害虫防除暦の防除体系で被害を回避できます。しかし、多発生時には、次々と園内に飛来するので、残効の長い薬剤を用いるなど、工夫が必要です。薬剤の残効期間の目安は、合成ピレスロイド系、有機ケイ素系、ネオニコチノイド系薬剤で 5~10 日程度、有機リン系薬剤で 2~3 日程度です。また、ネオニコチノイド系薬剤は忌避効果が期待できます。薬剤は、風のない早朝に散布してください。

各薬剤の使用できる回数や収穫前日数をラベルで確認し、周囲への飛散（ドリフト）に十分注意してください。

・今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 6月30日から7月29日)

気象庁(6月29日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	30	30	40
日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

天気は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は, 1週目は平年並の確率50%です。

< 1週目の予報 > 6月30日(土曜日)から7月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

< 2週目の予報 > 7月7日(土曜日)から7月13日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

< 3週目から4週目の予報 > 7月14日(土曜日)から7月27日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

・テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために, 病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号: 029(226)5321, 6131

7月上旬 果樹病害虫の発生現況と防除対策について

7月下旬 水稻のいもち病と斑点米カメムシ類の対策について

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。